

（株）カラーリングファーム

代表取締役 檜原憲一さん
久留米市

有機農業って
やりがいがあって、
楽しいです！！

地域で入手できる有機物、
その色々な特性を活かして
どう利用するか、それが醍醐味！

株式会社カラーリングファームでは、有機栽培でラディッシュを中心にほうれん草や小松菜を生産しています。

ラディッシュの栽培を開始したのは先代が経営する1980年代から。この地域は他産地で生産されていない品目を一早く取り入れてきた地域で、その後、JAの部会が設立され、出荷先が関東に拡大し、同社も慣行栽培で生産規模を拡大していきました。2003年には現在の代表取締役である檜原憲一さんが就農。その後、経営継承し、2011年に法人化しました。

それまで順調に規模拡大を図ってきた同社が有機栽培に転換したきっかけは、農薬を使用しても効果が出ない、病気の増加、発芽がそろわない等、収量が低下するという事態に直面したこと。今までの栽培方法を見直す必要があり、関係者からの助言や書

物等から土づくりの大切さを学び、2017年から有機栽培に取り組み始めました。最初は苦労したものの、土の状態が徐々に良くなっていくことを実感し、ラディッシュの発色が良くなったり、春先に発生しやすい芯の隙間が出なくなる等、品質も向上。2021年には有機JAS認証を取得しました。現在も、有機栽培での規模拡大や安定生産に向け、社内で栽培技術のアイデアを出しながら取り組んでいます。

株式会社 カラーリングファーム

栽培品目：ラディッシュ、ほうれん草、小松菜

加工品：ラディッシュのピクルス

栽培面積：ハウス 2.3 ha(約70棟)、露地 3 ha

販路：JA、直接出荷(小売店など)

Coloring farm
株式会社 カラーリングファーム





有機栽培の概要

1. 有機栽培の取組

ハウスではラディッシュを中心に、ほうれん草と小松菜を組み合わせ、約7作/年、油かすや堆肥を施用して栽培しています。露地では鶏糞を中心に施用し、各品目に加え、夏はソルゴーやヘアリーベッチ等の緑肥も栽培し、土づくりに活かしています。

病害虫対策については、窒素成分が多くなると害虫が寄ってきやすくなるため、そのコントロールを重視しています。毎作、自社で簡易的な土壌分析を実施し、窒素成分の確認を行い、年2回程度、分析機関でより詳しい土壌分析を実施し、施肥設計を行っています。なお、やむを得ない場合は、有機JAS認証の規格を遵守した形で生物農薬等を活用しています。

2. こだわりポイント

慣行栽培で行き詰まりを感じていた当時、土壌の有機物不足、団粒構造ができていない点、生物の多様性が少ない点に気づいたという檜原さん。現在も土づくりを大切にしています。これまでに廃菌床等の様々な有機物や緑肥の施用に取り組む等、より良い土づくりに向け、試行錯誤しています。また、4～10月頃には毎作、資材投入後、ビニールを被覆し、太陽熱を利用した高温処理を行っています。真夏であれば数日程度実施し、病気や雑草の抑制につながっています。



ほ場(ラディッシュ)



経営面の取組・工夫

正社員4名、パート3名、技能実習生・特定技能実習生10名の体制で野菜の栽培、調製、加工品（ラディッシュのピクルス）の製造・販売を行っており、2024年にGLOBAL G.A.P.を取得しました。

約70棟あるハウスや各ほ場の栽培から出荷までの過程を管理するため、当初は市販のシステムを利用していましたが、より自社の作業体系に合うように、アプリを活用して独自のシステムを開発し、利用しています。また、ハウスの土壌水分管理について誰でも対応できるようにする等、作業の標準化や共有化を図る工夫を行っています。



商品

販路はJAを通じた市場出荷や小売店等との契約です。加工品の製造を始めた際に展示会に出展し、仲卸会社を紹介いただいたことでスムーズに販路拡大につながりました。見た目も重視されるラディッシュに関しては、収穫、洗浄、選別、根切り等の作業を手作業で行っています。商品は、葉付きの有無等、出荷先に応じて対応しています。小売店に足を運び、棚持ちのよさや購入したいと思ってもらえるような調製や包装のヒントを得ることもあります。また、有機栽培に転換したことで、資材コストは低下し、販売単価は向上しました。



調製作業



今後の展開

ラディッシュや有機栽培のほうれん草の需要が高く、新たに約0.5 haの農地を確保することができ、約20棟のハウスを増設する等、規模拡大を図っています。葉物野菜の有機栽培の難しさを実感しています

が、緑肥や地域の有機物の活用等、今後も土づくりに取り組み、安定生産につなげていきたいと考えています。加工品に関しても、将来は有機JAS認証を取得したいと考えています。

もっと聞いてみました！

Q. 有機栽培の魅力は？

A. やりがいがあって楽しいです！土がだんだん良くなっていき、野菜の品質も良くなっていくことを実感しています。地域には様々な有機物がありますが、それぞれの特性を理解して、それをどう活用していくのか、それが醍醐味です！

当初、土壌に有機物が足りていないと考え、まずは菌床栽培きのこの廃菌床等をかなりの量を投入していったところ、土の状態がよくなっていました。それぞれの状態の土壌にどんな有機物が合うのか、その有機物の分解具合や成分等、理解して試してみることが楽しいです。地域の資源を利用した自家製の植物性堆肥を作りたいとも考えています。



Q. 慣行から転換した当時はどうでしたか？

A. ハウスで有機栽培ができるのか、初めは不安もありました。まずはハウス1棟から始めましたが、次作からは一気に約70棟で実施してしまったんです。もちろん、収量は低下し、辛い局面もありました。それでも土づくりに励み、1年に何作も生産することもあり、1年程度で満足のいく収量・品質に回復しました。また、慣行栽培では化学農薬を利用して土壌消毒を行っていましたが、重労働でもあり、元々実施したくないと思っていたので、その作業が無くなることは嬉しかったです。また、その代替技術をどうするのか、皆で必死になってアイデアを出しながら取り組みました。

Q. 有機JAS認証の取得で大変だったことは？

A. 有機JAS認証制度自体を理解することです。肥料の原料まで遡って原料証明を行う必要があること等、初めて知りました。立地条件等の困難はなかったです。

Q. 課題は？

A. 水害、酷暑とそれによる害虫の増加です。年々、夏の暑い期間が長期化し、収量が低下する期間も長くなってきたので、対策を模索中です。

Q. どうしたら有機農業が広まると思いますか？

A. 慣行栽培の生産者にとって、有機農業はハードルが高いと感じる場合が多いと思います。慣行栽培では、土壌分析を行っても肥料を減らすことがプレッシャーに感じる等、どうしても施肥量が多くなりがちな面もあると思います。まずは、いきなり有機栽培ではなく、一区画でいいから試験的に有機質の肥料を利用する等、少しずつ取り入れていくと始めやすいのでは。肥料価格が高騰する中で、「基肥で少し鶏糞を利用すると肥料代が下がりますよ」という提案はどうでしょうか。実際に経験してみると、「こんなに肥料代が下がるなら勉強してみようかな」という気持ちになるのではないかと思います。